

# 大学スポーツ現場における新型コロナウイルス感染予防対策調査

Survey of Preventing Infection COVID-19 in University Sport

吉 田 昌 弘	石 川	凌	吉 田	真
YOSHIDA Masahiro	ISHIKAWA	Ryo	YOSHIDA	Makoto

北翔大学北方圏生涯スポーツ研究所年報 第12号 2021

Bulletin of the Northern Regions Lifelong Sports Laboratory Hokusho University Vol. 12

## 大学スポーツ現場における新型コロナウイルス感染予防対策調査

### Survey of Preventing Infection COVID-19 in University Sport

吉田 昌弘<sup>1)</sup> 石川 凌<sup>2)</sup> 吉田 真<sup>1)</sup>

YOSHIDA Masahiro<sup>1)</sup> ISHIKAWA Ryo<sup>2)</sup> YOSHIDA Makoto<sup>1)</sup>

キーワード：新型コロナウイルス感染症，感染予防対策，大学スポーツ

#### I. はじめに

世界的な感染爆発を引き起こした新型コロナウイルス感染症により，日本でも緊急事態宣言が発令され，多くの社会経済活動に影響を与えた。スポーツ活動も例外ではなく，大会や練習が中止となり，多くのアスリートが活動を制限された。日常生活における感染対策が示される中，スポーツ活動においても，さまざまな競技団体から各競技に沿ったガイドラインが提示された<sup>1-3)</sup>。大学スポーツにおいても，一般社団法人大学スポーツ協会 (UNIVAS) から大学スポーツの再開に向けたガイドラインが示されており，感染対策の指針が示されている<sup>4)</sup>。緊急事態宣言の解除や感染経路の判明などに伴い，徐々に社会経済活動が再開され，スポーツ活動においても様々な感染対策を実行しながら活動が再開されている。

しかしながら，新規感染者数はその後も増減を繰り返しており，スポーツ活動を通じた感染例や集団感染の報告も散見される。スポーツ現場では，各ガイドラインを参考とした感染対策がなされているものの，練習場所の広さや施設の設備などの環境的な違いから，ガイドライン通りの対策が困難な場合もあり，より一層の工夫が必要であると考えられる。

そこで本稿では，大学の体育・スポーツの実技科目および部活動のスポーツ現場における感染症対策に関する調査を行ったため，感染対策および安全管理の現状と課題を整理し，報告する。

#### II. 方法

調査対象は2021年度前学期に北翔大学生涯スポーツ学

部スポーツ教育学科で開講された実技系10科目および部活動13競技団体とした。調査期間は2021年6月21日～8月6日であった。新型コロナウイルスの感染対策の状況は，1) 換気，2) 消毒，3) 飛沫，4) 接触，5) 体調の5つのカテゴリに分類された計10項目より判定した



図1 感染予防対策調査のチェックシート

1) 換気，2) 消毒，3) 飛沫，4) 接触，5) 体調の5つのカテゴリに分類された計10項目より判定した。各項目3点満点の計30点で対策状況を総合評価した。

1) 北翔大学生涯スポーツ学部スポーツ教育学科

2) 北翔大学スポーツ科学センタースポーツクラブ

大学スポーツ現場における新型コロナウイルス感染予防対策調査

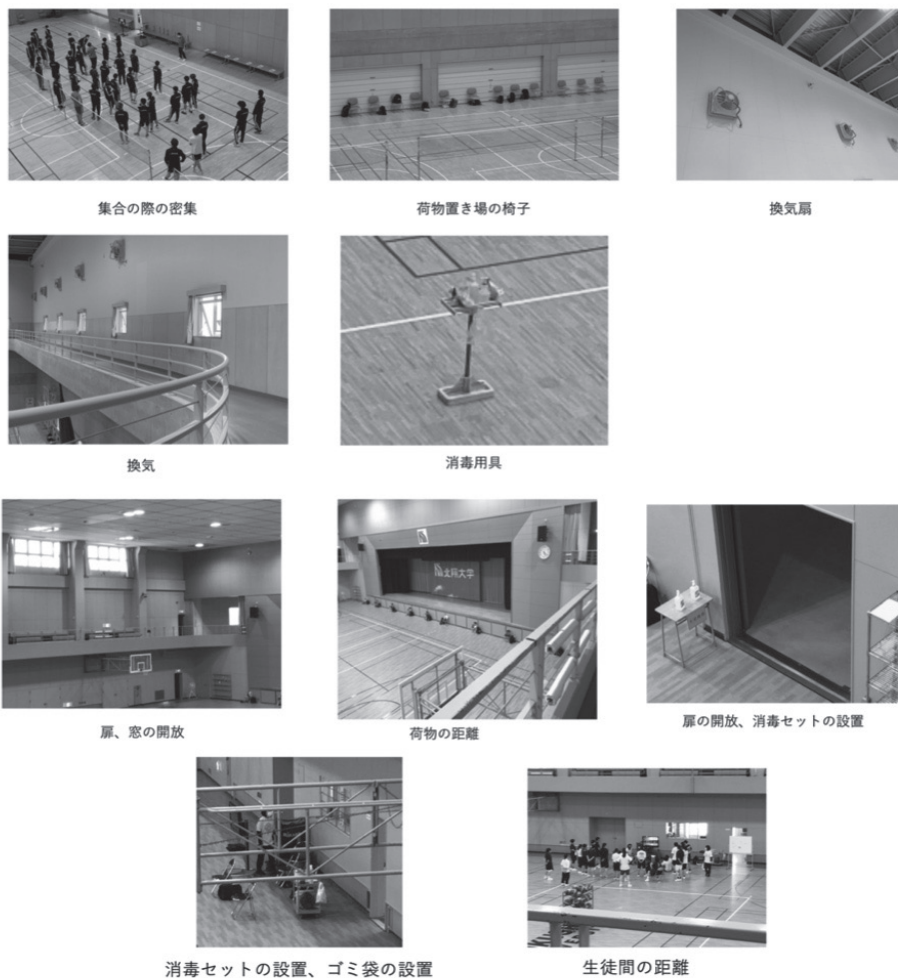


図2 評価のポイントとなる感染対策状況

\*月\*日 \*\*年\*\*クラス @スポルホール

【人数】 37名+教員2名  
 【観察時間】 9:15-9:50 10:40-11:00  
 【マスク着用状況】 37名+教員2名  
 【天気】 雨

【観察記録】

- ・1人1人椅子を使用して荷物を置いていた。その際には、横の人と同じ方向に向くようになっていた
- ・前日の行動履歴をFormsにて確認をしていた
- ・ラケットは人数分、代表者が取りに行きグループの渡していた
- ・授業開始の集合の間隔が狭かった  
→前後左右が被らないように間隔（約2m）あけ集合させる。
- ・練習中に練習中に空いているコートや1コートペアの場所があった（1コート3ペア6人）  
→練習前に配列や場所、人数を決める。
- ・不必要な教員のボディータッチが多い。  
→ボディータッチをしないようにする
- ・指導の時に声が大きく、学生との距離が近い  
→2mの間隔をあけ、必要最小限の音量で指導を行う。

【外傷・障害】

- ・羽が近くに落ちている状態で前後の動きを行っていたので怪我をするリスクが高い  
→羽の使用個数を決める

時間	熱中症指数 (WBGT)[°C]	気温(TA) [°C]	黒球温度 (TG) [°C]	相対湿度 (RH)[%]
9:15	22.5	22.5	24.0	58.5
9:30	22.4	22.4	23.3	54.1
10:40	22.5	22.5	23.7	61.6
11:00	23.1	23.1	26.3	53.0

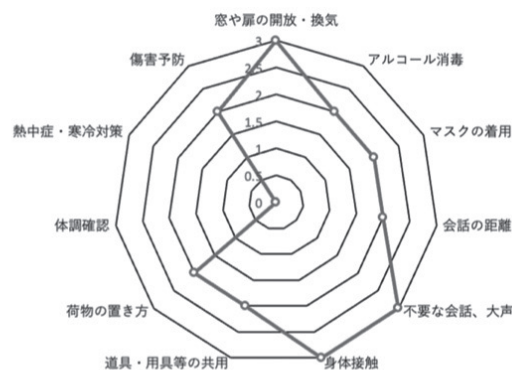


図3 フィードバックシートの一例

感染対策の特徴をレーダーチャートで視覚化した。状況の好評点および改善点をコメントとして付記し、今後の対策方法の一助となるようフィードバックした。

(図1). 各項目は3段階で採点し(3:感染対策が十分にできている, 2:一部改善の余地あり, 1:要改善, 感染拡大の可能性あり), 計30点の点数により対策状況を総合評価した. 具体的な感染対策の状況や工夫は, 写真撮影し記録した(図2). 評価は本学学生トレーナー(アスレティックトレーナー実習生およびトレーナー部部員)が複数名(2~3名)で実施し, 評価者の平均点を採用した. また, 実技科目環境の調査として, 熱中症指数(WBGT), および二酸化炭素濃度を計測した.

調査結果を元にフィードバックシートを作成し, 科目担当者および部活動指導者へフィードバックした(図3). フィードバックシートには, 感染対策の特徴を示したレーダーチャートを掲載した. さらに, 各実技科目における対策状況の好評点および改善点をコメントとして付記し, 今後の対策方法の一助となるようフィードバックした.

### Ⅲ. 結果

本調査の対象者数は626名(実技科目342名, 部活動284名)であった. 全体の点数は $24.6 \pm 2.4$ 点であった(表1). 実技科目における点数は $24.7 \pm 1.9$ 点, 部活動では $24.5 \pm 2.9$ 点であり, 活動形態における点数の差異は認められなかった. 活動形態別の項目毎の比較によると, 実技科目では体調確認や熱中症対策, 傷害予防の項目で点数が低かった. また, 部活動では消毒実施の項目で点数が低く, 改善の余地がみられた. 会話および荷物の距離は実技科目, 部活のいずれも点数が低かった.

活動場所(屋内・屋外)における点数では, 屋外でやや高い傾向が認められた. 活動場所別の項目毎に比較したところ, 屋内活動では傷害予防の項目で点数が低い傾

表1 活動形態および活動場所別の調査結果(平均値±標準偏差)

	実技科目	部活動	屋内	屋外
合計点	$24.7 \pm 1.9$	$24.5 \pm 2.9$	$24.3 \pm 2.6$	$25.1 \pm 2.0$
窓や扉の開放・換気	$3.0 \pm 0.1$	$2.8 \pm 0.5$	$2.8 \pm 0.4$	$3.0 \pm 0.0$
アルコール消毒	$2.7 \pm 0.3$	$2.4 \pm 0.7$	$2.5 \pm 0.5$	$2.6 \pm 0.7$
マスクの着用	$2.7 \pm 0.4$	$2.6 \pm 0.4$	$2.6 \pm 0.4$	$2.7 \pm 0.4$
会話の距離	$2.0 \pm 0.2$	$2.1 \pm 0.5$	$2.1 \pm 0.4$	$2.0 \pm 0.4$
不要な会話・大声	$2.3 \pm 0.4$	$2.5 \pm 0.3$	$2.4 \pm 0.4$	$2.3 \pm 0.4$
身体接触	$2.8 \pm 0.6$	$2.8 \pm 0.4$	$2.7 \pm 0.5$	$2.9 \pm 0.2$
道具・用具の共有	$3.0 \pm 0.1$	$2.9 \pm 0.2$	$3.0 \pm 0.1$	$2.9 \pm 0.2$
荷物の置き方	$2.1 \pm 0.5$	$2.1 \pm 0.7$	$2.2 \pm 0.6$	$2.1 \pm 0.6$
体調確認・熱中症・寒冷対策	$2.5 \pm 0.5$	$2.8 \pm 0.2$	$2.7 \pm 0.4$	$2.6 \pm 0.4$
傷害予防	$2.3 \pm 0.6$	$2.7 \pm 0.4$	$2.4 \pm 0.6$	$2.7 \pm 0.5$

向がみられた. 会話および荷物の距離は, 屋内・屋外のいずれも点数が低く, 改善の必要性が確認された.

### Ⅳ. 考察

本調査における感染対策状況は, 基準内の8割以上(30点満点中 $24.6 \pm 2.4$ 点)を満たしていたことから, 十分な対策が取られていたと判断した. また, 本学内において新型コロナウイルス感染者の発生が認められたものの, 実技科目や部活動中の活動が起因となる感染およびクラスターの発生は無かった. 感染に終息傾向がみられない期間での活動であったが, 予防対策を徹底することにより, 安全に活動を進められることができたと言える.

北海道では2020年11月~2021年2月にかけて新型コロナウイルスの感染者数が急増した(いわゆる第3波). 2021年3月頃より収束傾向がみられ始め, 本学の危機管理行動指針はレベル3からレベル2へ引き下げられた. これにより, 課外活動におけるスポーツ活動も条件付きで再開が認められた. しかしながら, 4月初旬より全道的に感染者が増加に転じ, 5月16日には緊急事態宣言(~5月31日解除)が発令された. 本学も危機管理行動指針は最高レベルの4へと引き上げられ, ほとんどの授業が遠隔で開講することを余儀なくされた.

このような感染拡大の状況を受け, 本学では遠隔授業を基本として教育活動が行われたが, スポーツ教育学科では資格取得に関わり実技・実習を必要とする科目も多く, 必要な技術指導などを含めて, 遠隔授業では十分に指導が行き届かないことが懸念された. 新型コロナウイルス感染症への対策の徹底と, 学修機会の確保の両立を目指し, 危機管理行動指針のレベルを維持したまま対面授業が再開された.

スポーツ等の実技系科目では内容の特性上, 身体接触や物の共有が生じやすく, 特に感染リスクが高まることが想定された. 競技毎に参加人数, 環境などの状況が異なる中, それぞれが感染対策を施し, 感染リスクを最小限にして実技が展開された. しかしながら, 科目担当者や指導者のみでは十分に目が届かない点があるため, 外部からの客観的な対策評価により, 感染リスクを未然に抽出する必要性があった. 本調査を元に提供したフィードバック資料は, 感染対策をより徹底・改善し, 安全に実技を実施することに繋がった. さらに, 調査を担当した学生トレーナーにとっては, スポーツ現場における感染症対策の経験を積む機会となり, 副次的な学習効果も得られた.

高等学校を対象に実施した調査によると, 身体接触の多い体育の授業では, 競技時間を短縮する措置が取られていたとの報告<sup>5)</sup>もある中, 本学では対策を徹底した

上で講義時間は短縮せず、従来通りの指導時間を確保した。また、講義や部活動の実技が起因となる感染拡大は発生しておらず、学修機会の確保と感染予防を両立できたことは大きな成果であった。

2021年10月より北海道内における新規感染者は急速に減少しており、様々な制限が解除に向けて動き出している。本学でもこのような状況に加え、ワクチンの職域接種が終了したこと相まって、危機管理レベルはレベル1に引き下げられた(2021年11月1日現在)。今後も新型コロナウイルスが収束するまで、感染状況や国および北海道の指針に合わせた予防対策を継続することが求められる。本学としても、引き続き連携を図りながら状況に合わせた感染対策を徹底することが必要である。

## 付記

本研究は「令和3年度北翔大学北方圏生涯スポーツ研究所の研究費」を受けて実施された。申告すべき利益相反状態はない。

## 文献

- 1) 公益財団法人日本バスケットボール協会：JBAバスケットボール事業・活動ガイドライン第3版。  
<http://www.japanbasketball.jp/news/58115> (参照2021-11-6)
- 2) 公益財団法人日本バドミントン協会：新型コロナウイルス感染症対策に伴うバドミントン活動ガイドライン。  
[https://www.badminton.or.jp/covid-19\\_1/](https://www.badminton.or.jp/covid-19_1/) (参照2021-11-6)
- 3) 公益財団法人日本サッカー協会：JFAサッカー活動の再開に向けたガイドライン(47都道府県サッカー協会/9地域サッカー協会向け)第9版。  
[https://www.jfa.jp/about\\_jfa/guideline.html](https://www.jfa.jp/about_jfa/guideline.html) (参照2021-11-6)
- 4) 一般社団法人大学スポーツ協会安全安心委員会：新型コロナウイルス感染症対策としての「UNIVAS大学スポーツ活動再開ガイドライン」(第5版)。  
<https://www.univas.jp/article/73545/> (参照2021-11-6)
- 5) 丸岡俊之：コロナ禍における学校の安全管理と学校教育への影響。近畿大学教育論叢, 32(2)：1-22, 2021.